

# 学校新聞 芥川

## 37期生から広げる「防災」「減災」の輪 第 学年主任

修学旅行前の集會にて、私は生徒たちに次のように伝えました。「どんな自然災害に見舞われても、30年後の同窓会は生きて、みんなでおおう。そのため、震災・防災・減災について学んでいこう。修学旅行は、もっとレジャー感の強いところに行きたかった人もいるだろうけれど、元気に、生きていけば将来どこにだっていける。生きるための学びをやっていこう。」こんなに格好良く話せていたかはわかりませんが……

さて、修学旅行を終え、本格的に始まった「防災」「減災」学習。その第一弾が、11月16日に行われた全校集會での被災地学習発表でした。亘理町、山元町、気仙沼市、石巻市、各被災地に赴いたクラスの修学旅行委員代表者が、現地での学んだこと、そこから考えたことを発表してくれました。スライド資料と発表原稿を作成し、練習も行う周到ぶり。結果は、大成功でした。高校生の豊かな感性が活かされた素晴らしい発表で、生徒たちはもちろん、教職員も感心する内容でした。以下、まとめです。

・震災「後」には様々な対策が取られるけれど、「後」で考えるより大切なのは、「今」でできることを考えること。

・誰かが助けてくれると思わず、常に自分の命は自分で守る意識を持つべき。



いざという時、集団心理に流されず正しい判断ができるように、日頃から避難経路などを確認すべき。震災被害は「想定外」の一言で終わらせてはいけません。「想定外」の想定をすべき。すべて、震災について0から学んだ高校二年生のことばです。本場に立派な発表でした。

「防災」「減災」学習第二弾は、神戸市の「人と防災未来センター」(阪神淡路大震災を経て建てられた学習施設)の訪問です。12月14日、神戸市には今季一の寒波を忘れるほど気持ちのいい青空が広がっていました。学年を三つの班に分け、異なるルートで施設内を回りました。集合時には遠足気分が口角を上げていた彼らも、語り部さんのお話や当時の被害を再現した映像が始まると、自然と口を真一文字に結び、真剣な顔つきに。語り部さんのことばには、経験者だからその力強さがあり、一言も聞き逃すまいと、私もメモを取りました。「私は3ヶ月ぶりに、たまたま早朝山歩きをしていたときに被災した。いっどこで被災するかはわからない。」「電車のつり革を持っていたかどうかで生死が分かれた家族がいた。発災時に肝心なのは、「体力」と「判断力」。「被災当日に救助が来ると思っていない。まずは自助が肝心だ。すべて、これまでの学びの中にも聞いたことのある話ですが、当事者のことばは、やはり重い。本場に貴重なお話でした。発災当時を再現した映像は、まさにその場を



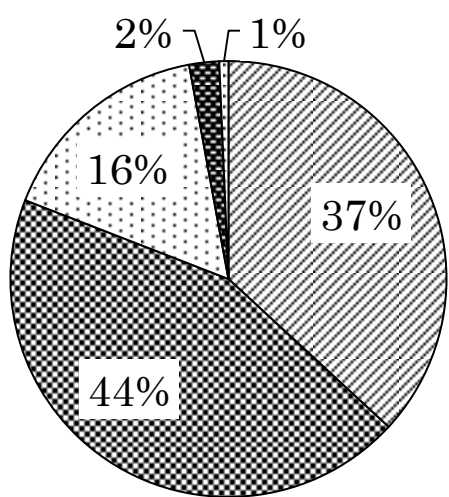
撮影していたかのようなリアルさで、生徒たちも我々教員も息を飲みました。私の前に立っていた生徒は、「地震って、ほんまに怖いんや……。ほんまにきたら、どうしよう……。」とつぶやいていました。その恐怖を、ぜひ自分の命を守る行動準備につなげてほしいと思います。「恐怖感をおおるなという大人がいるが、恐怖感をおおってでも子どもたちに自分の命を守ることに大人の役目だろう!」という東北で被災された方から伺ったお話を思い出します。資料展示スペースでは、それぞれがしおりに書かれている課題に取り組みました。こちらが指示を出すまでもなく、フロアに散開して資料とにらめっこしながらメモを取る姿が頼もしかったです。

夏前から進めてきた「震災」「防災」「減災」の学習ですが、取り組む生徒のまなざしは確実に変わってきています。芥川高校37期、たった360名ほどの高校生が、一人ひとりが真剣に「防災」「減災」に向き合い、命に向き合って、その輪が大きく広がっていくことを期待して、我々は今後も学習をサポートしていきます。

……しかし、幼い頃に観た「ルパン三世」のアニメ映画にこんなセリフがありました。「命あつての物種だな。まったく、その通りです。この記事を読んだ、一人でも多くの生徒、教職員、保護者の方、地域の方が、「防災」「減災」について考え、準備を始めていただくことを願って、寄稿させていただきました。

**芸術鑑賞 演技の迫力に引きこまれた『ハンナのかばん』**

7月11日(火)、芸術鑑賞を高槻現代劇場で行ないました。今年の作品は、劇団コロロの『ハンナのかばん』。ナチスドイツによるユダヤ人の強制連行、ホロコースト(大量虐殺)を扱った演劇でした。タイムスリップした現代の高校生が、ひとつのカバンの持ち主ハンナに降りかかる様々な困難に直面します。役者さんの真に迫った演技で劇に引きこまれた生徒も多かったようです。「家族の絆・兄妹の絆に感動した」「自分の今の幸せな生活を実感した」「本当の歴史を勉強できてよかった」「文化祭ステージに生かしたい」等の感想がたくさんありました。「ムカデの歌」を帰りに歌ったという声も。多くの生徒が、この作品の重い問いかけを



- とてもよかった
- よかった
- ふつう
- よくなかった
- まったくよくなかった



すっかり自分のこととして受け止めていたように感じます。

公演後の交流会には約20名が参加し、ハンナ役・現代のお兄さん役の役者さんとの交流を行いました。ハンナ役の役者さんは、ハンナ役での初舞台だったそうです。お兄さん役の「この話は決して一人の少女が死んだという話ではない。彼女たちが困難な時代をどう生きたかという話だ。」という言葉が参加者の心に響きました。